

# 院外茶話

vol.111 平成26年8月1日

村のはずれのお地蔵さんは  
いつもにここにきてござる  
お地蔵さんはいったい  
何を見ていたのでしょうか

## お地蔵さんの旅



地蔵堂は散歩の折り返し点。

等々力のお地蔵さんに出会ったのは、ちょうど20年前。

なぜ、そんなことを覚えているか。それは我が家にラブラドルの子犬、テオ君がやってきた年だから。朝晩の散歩にいろいろな道を歩いてみた結果、このお地蔵さんまでの往復が眺めもいいし、距離もいい。テオ君にはお地蔵さんの前で毎日お参りを教えたけど、ついに覚えなかった。

祠は細い路地に面した私有地の一面にあって、人目につく所ではない。お地蔵さんはもともと村の入り口やあぜ道に祀られることが多かった。そう思って辺りを見回せば、近くには古い農家があって、大きな母屋の他に物置を兼ねた離れがあるとところを見れば、相当な豪農だったに違いない。

時がたって田畑がなくなって、宅地に変わったとしても、なかなか片づけるわけにいかないのがお地蔵さん。個人の敷地の中にも半坪ほどのスペースを残していた。

そういえば都心のビルの屋上に鳥居を見る

ことがあるから、この場合は神社が立ち退きを強いられて、ビルの屋上に引っ越したということだろう。

やがて一緒に散歩をしたテオ君もいなくなって数年が経つが、この道を歩く習慣は続いている。お地蔵さんの両脇にはいつも花が生けられ、ときには5円、10円の賽銭がパラパラと散らばっている。



テオ君と毎日でかけた散歩道。

こうして毎日気楽にお参りをするけれど、お地蔵さんとは地蔵菩薩のことで、もともとは閻魔様と同じ存在でもあった。日本じゅう、いたるところに石像があるので、人々の様子を事細かに見て、死者の裁きがより正確にできる。そんなこととは知らなかった。

村のはずれのお地蔵さんは  
いつもにここにきてござる

にここにきているだけではなくて、それは監視カメラのような役割も兼ねていたのである。偶然とはいえ、20年もの長きにわたって、自分がお参りをする姿を見てもらったことは正解であった。多分、これで地獄にも行かずに済むだろう。

仏教には輪廻の思想があって、あらゆる生き物は六道を繰り返し生きて、永遠に生まれ変わる。時に畜生として暮らしたり、次の人生は天国だったり、また地獄だったり。娘の絵本に「百万回生きた猫」という話があったけど、これは輪廻のことだったのか。

では、永遠に続く世界の中でお地蔵さんは何をしているのか。ただ、人々を裁いているだけではない。菩薩様としても六道を歩き、人々を救っているのである。

毎日お参りをするお地蔵さんは一躰だから、六道を順に巡ることになるが、近くの九品仏には六躰の地蔵像が並んで、この場合は六道を分担して巡るのかもしれない。

九品仏の阿弥陀様は九躰なのに、どうしてお地蔵さんが六躰なのか、ようやく謎が解けた。



九品仏の六地蔵。

こうしてお地蔵さんは、日々六道を歩きながら特に弱い立場にある子供たちに手を差し伸べる。幼くしてなくなり、三途の川も渡れずに鬼のいじめにあっている子供の魂を救うのである。

現世で子供を助けてもらった親は、お礼に赤い頭巾とよだれかけを持っていくから、お地蔵さんはいつでもこの格好で立っている。

これが本来の地蔵菩薩だけど、人々の願い事は多岐にわたって、その都度お地蔵さんの名前も変わる。子育て地蔵に水子地蔵。身代わり地蔵とは、一体何の身代わりになるのか。妻と喧嘩をして負けたときには、是非このお地蔵さんをお願いに行こう。

他にもとげ抜き地蔵やイボ取り地蔵があって、イボは本当にとれるのか。

目黒はお地蔵さんの多い土地柄で、下目黒のおしろい地蔵にお参りをすれば、美人になれる。都立大学は八雲氷川神社の境内にあるのが

くずれ地蔵。身体が痛んだときに、お地蔵さんの同じ部分をさすると痛みが癒える。あまりさすられるので、お地蔵さんの身体が次第にくずれてきて、こう呼ばれるようになった。

油面の高地蔵尊は、失った視力も回復してくれるそうで、眼医者としてはこういうお地蔵さんが近くにいるとちょっと困る。

そういう私も多分気づかぬだけで、等々力のお地蔵さんにはいっぱいお世話になっていたと思う。テオ君が大病をして、奇跡的に蘇った時も二人でお礼に行ったけど、やはりテオは横を向いていた。



ある日お地蔵さんがいなくなった。

しかし平成25年暮れのある日、いつものようにお参りに行くと、お地蔵さんがいない。祠の屋根もなくなって、そこには一枚の貼紙が残されている。引っ越し先は五反田の長命山地蔵院徳蔵寺だと。

ほどなくこの民家も取り壊されて空き地になったから、お地蔵さんには丁重に立ち退いて頂いたのだろう。

小柄なお地蔵さんは、昔から大きな仏様や阿弥陀様と違って身が軽い。特に栄えている村のお地蔵さんはよく盗まれて、頻繁に旅をしたと言うから、この度もそんな移動だろう。

台湾の三狭に出かけたときに、寺の回りにはごった返す参拝客で原宿のよう。そこに、けたたましい爆竹音とともに、我が物顔でやってきた軽トラックがいて、人々はたちまち道をあける。聞けばトラックの荷台には隣村の仏様が乗っていて、ときどきこうして遊びに見える。

大型の仏様ともなると、トラックの移動になるけれど、こうして行脚をしながら人々の魂を救って下さるのなら、それもありがたいことだ。